

週刊ダイヤモンド 今週の逸冊

北村行伸

平成 19 年 8 月 20 日号

「神は妄想である 宗教との決別」

リチャード・ドーキンス(著)、垂水雄二(訳)

早川書房 2007年5月25日刊

本書は当代随一の進化生物学者である、ドーキンスが宗教に真っ向から挑んだ、極めて刺激的な書物であり、未永く読まれる古典となることを約束された内容を持った逸冊である。

ドーキンスが宗教、とりわけキリスト教原理主義に反発しているのは、彼の専門分野である進化論がキリスト教と真っ向から対立しているということと関係している。また、アメリカのキリスト教原理主義と中東のイスラム教原理主義者の対立が、実際に武力紛争に結びつき、そこからの出口が見えない状態であることにも関係している。

しかし、ドーキンスの真意は次に要約されていると思う。「宗教上の原理主義者たちは、自分は聖典を読んだのだから自分の考えは正しいという考え方をする人たちで、何をもってしても自分たちの信仰が変わることがないと、あらかじめ知っている。それに対して、私が科学者として真実だと考えること(たとえば進化)は、聖典を読んだからではなく、証拠について調査・研究をおこなった上で、真実だとみなしているのである。もし、それを反証するような新しい証拠が出されれば、一晩で放棄することになるだろう」。これが、彼が宗教をしりぞける決定的理由である。

ドーキンスの基本認識は、宇宙の中でとりわけ特別な位置にあるわけでもない地球に、生命体が発生し、それが長い進化の過程を経て、人類が誕生し、我々が今この地球に生きており、高度な文明社会を築いてきたということ自体が奇跡であり、途方もない幸運だということである。そして、この地球上では、我々はたった一度の人生しか経験できないということが、命をいっそう貴重なものとするはずであるということである。

本書は決して楽な読み物ではないが、夏休みにじっくり読んで、思索に耽るにはもってこいの一冊である。典型的な日本人であれば、特定の宗教を信じていない方が多いかもしれない、それでも世界の主要宗教の内容を知りたい方には、中村圭志『信じない人のための〈宗教〉講義』(みすず書房)を併せてお読みになることをお勧めする。